



写真：原田雅樹氏（清泉女子大学公式サイトより）

講演とパネルディスカッション

「今こそ原発の廃止を」－くらしの安心と安全を考えよう－

講師：原田雅樹氏（清泉女子大学教授・ドミニコ会神父）

日時：10月15日（日）14時30分～16時30分

会場：カトリック元寺小路教会 大聖堂

人形劇上演「葛尾大尽物語（かつらおだいじんものがたり）」

上演：元気なかつらおプロジェクト（福島県葛尾村民有志）

日時：11月11日（土）14時開演

会場：東北教区センター「エマオ」3Fホール



長野県坂城町公式サイトより

こども甲状腺エコー検査

日時：11月18日（土）10時～16時

会場：仙台市泉区「いずみ愛泉教会」

検診：寺澤政彦医師（てらさわ小児科）

いずみの活動は国内外のキリスト教支援活動によって支えられています。この活動を続けていくために皆様のご協力をお願いいたします。いずみへの献金は下記専用口座をご使用下さい。

ご支援のお願い

送金先金融機関 ゆうちょ銀行

口座番号 02220-5-137681

加入者名 日本基督教団東北教区

通信欄に「放射能問題支援対策室いずみ指定献金」とお書きください。

運営委員長 布田秀治（いずみ愛泉教会）

運営委員 明石義信（常磐教会） 鈴木のぞみ（川俣教会）

保科 隆（福島教会） 布田秀治（いずみ愛泉教会）

室長 保科 隆（福島教会）

顧問 篠原弘典（原子核工学専門家）

スタッフ 会津かよ子 笠松絹子 服部賢治

会計協力 渡辺広衛

日本基督教団東北教区 放射能問題支援対策室いずみ

UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force “IZUMI”

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6

TEL/FAX 022-796-5272

メールアドレス izumi@tohoku.uccj.jp

ホームページ <http://tohoku.uccj.jp/izumi/>

いずみ

題字 丹治正雄氏

第1回いずみこひつじキャンプ 実施報告

2012年以降、日本基督教団が実施していた「こひつじキャンプ」を放射能問題支援対策室いずみが引き継ぎました。2017年度は2回開催を予定し、「第1回いずみこひつじキャンプ」を去る7月15日～17日、富士山麓の東京YMCA山中湖センターにおいて実施しました。東京YMCAと共催、日本基督教団のご支援の下、福島県内 9家族28名の親子、いずみスタッフ2名が参加しました。次頁にかけ、キャンプの様子をご報告いたします。



郡山駅に午前8時15分集合、そこから富士山山中湖を目指してのバスの中、途中渋滞があり、7時間以上も乗っていましたが…。YMCAスタッフの方々は、車内でのゲームや歌で盛り上げてくださり、しっかりと子どもたちの心をキャッチしてくださいました、さすが！！富士山を目の前にしてのロケーションと期間中のプログラムは参加者親子の方々にとってどれも楽しく魅力的なものでした。何の制限もない草のグラウンドを走り回る子どもたちの歓声、ホールでの歌声、自然の中でこぼれる笑顔、大人も一緒に日常を忘れてリラックスできました。

保養を求める方々がおられる一方、「まだ保養に行っているの」という声も聞こえてくる複雑な現状があります。

短期保養ではありますが、心も体もリフレッシュされ、厳しい状況を乗り越える力になったことと思います。

♪ 再会を約束しての解散でした ♪

いずみスタッフ 会津かよ子

2017年7月17日
山中湖畔にて



◆参加者の感想より

3日間お世話になりました。1ヶ月前から家族みんなで楽しみにしていたいずみこひつじキャンプ!!お天気にも恵まれ、自然の中で普段の生活では体験できない遊びをたくさんさせていただきました。リーダーのみなさんにお世話いただき、とびっきりの笑顔で汗をたくさんかいて、のびのびと遊ぶ我が子を見て、とてもうれしく感じました。一緒に参加したお友達とも短い時間の中で、とても仲良くなり、またお母さん方やスタッフのみなさんと色々な話をさせていただき、情報を交換したり気持ちを共有したりと、とてもリフレッシュできる時間を持つことができました。たくさんの皆さんの助けをいただき、笑顔をいただきとても感謝しております。ありがとうございました!! (40代 母)



富士山麓・山中湖畔でのいずみこひつじキャンプ 9家族28名の親子が参加



わたしが楽しかったことは二つあって、びっくりしたことが一つあります。楽しかったことの一つ目は、流しそうめんです。水の流れがスライダーのように速く、上のほうだけではなく下のほうにもソーメンがたくさんあって、みんなで仲良くそうめんを食べたのが楽しかったです。また、そうめんだけでなくフルーツも流れてきて楽しさが二倍になりました。次に楽しかったことの一つ目は、花火です。本数もたくさんあってどれにしようか迷いました。また、打ち上げ花火も星のようにきれいで楽しかったです。最後にびっくりしたことはふじ山です。他の山よりとても大きくてびっくりしました。そして、朝のふじ山は色がはっきりしていて美しかったです。どんなこともとても楽しかったです。また、こうゆう機会があったらいろんなことに参加してみたいです。三日間、お世話になりました。(10代 女の子)

◆「いずみ」では、短期間の保養であっても、参加者親子の心身がリフレッシュされる効果が大きいと判断し、今後もこのような保養プログラムを継続して取組んでいきたいと願っています。



今後の予定

2017年10月7日(土)～10月9日(月)

第2回いずみこひつじキャンプ in 妙高高原

2017年8月3日～8月8日
第11回親子短期保養 in 北海道
福島県内七家族十九名の親子が参加

第11回親子短期保養プログラムに参加して

今回は、北海道保養プログラムに参加させて頂きありがとうございました。原発事故から六年経ち時間と共に線量が下がったというのは事実かもしれませんが、心の傷や後悔というのは消えないです。自分の事だけではなく、逃げたくても動けないママ友達とか色々な人の事を思い出して今でも涙が出ます。

娘たちは初の新幹線と初の飛行機、そして、とても気に入ったスタッフさんがいて、仲良くしてもらえとても喜んでいました。宿泊施設では快適に過ごす事が出来ました。毎日のタオルの交換や、朝食も毎日準備や片付けをして頂き本当に感謝しています。

百合が原公園での芝生の上でのまさかの☆オムライス☆最高でした。震災前はそういえばこんな風に外でお弁当を食べて幸せな気持ちになってたなあ、と懐かしい感覚を思い出しました。

自由行動の時は、友達が旧道庁前の広場で「プロジェクトふくしま」の一員としてイベントをしに来ていたので会いに行きました。そのイベントは元々原発事故後に福島県はとくに地面の線量が高く風呂敷で地面を覆ってその上で盆踊りをしましょう、という事から始まり、福島ではもちろんですが、カラフルな風呂敷が話題になり広がっています。今年は札幌国際芸術祭にも繋がりより多くの人に知ってもらえるきっかけになったと思います。辛い事もあったけど工夫次第で楽しくできるのだと感心しました。

北海道プログラムでは大変お世話になりました。子供たちはもちろん私にとってもとても楽しい思い出になりました。このプログラムを通して、色々な人と出会えた事は人生の宝物です。

たくさんの方に親切に頂いた事忘れません。

感謝しています。(40代 母)



外遊びやゲームの様子、右は現地スタッフ

北海教区東日本大震災支援委員会や札幌市内教会のご支援のもと、放射能問題支援対策室いずみと北日本三教区宣教会議主催「心と体をリラックス! 第11回親子短期保養プログラム」を実施しました。福島県内から7家族19名の親子といずみスタッフ2名が参加し、6日間の保養プログラムは無事終了しました。このプログラムにはウエスレー財団やカトリック正義と平和仙台協議会、個人の方からも多額の資金助成、ご支援いただきました。プログラムへのご支援、そして被災親子へのお祈りをお寄せ下さり本当にありがとうございました。

放射能汚染は今後も長期的に残ります。原発事故由来の放射線被ばくを避けるための保養や、被災親子を見守り、お支える取組みへのご理解・ご支援を今後ともよろしくお願いいたします。

寄 稿 「私の願い～放射能汚染に苦しめない世界を」 福島県伊達郡川俣町 鈴木さん（川俣教会）

2017年度、川俣教会員の鈴木さんがいずみ運営委員に新たに加わって下さいました。

新委員のご紹介を兼ね、寄稿いただきました。

私の願い～放射能汚染に苦しめない世界を 鈴木（川俣教会）

今年度、いずみ運営委員に選任されました川俣教会の鈴木です。私の体験が何かお役に立てることがあればと委員をお引き受けしました。

私は2011年3月15日～2015年3月末日まで次男と共に、福島県伊達郡川俣町から山形県米沢市に自主避難していました。2015年3月、次男が高校を卒業し大学進学したので、私は川俣町に戻りました。

以下は、2014年6月17日に日本キリスト教団全国教会婦人会連合第23回研修会の「被災地からの声」にて報告させていただきました。その内容を元に加筆補稿したものです。

○川俣町・川俣教会の震災時の状況と現在とこれからの歩みについて

私たちが遭われました川俣教会は、福島県伊達郡川俣町にあります。福島県の県庁所在地である福島市から太平洋に向かって南に20kmぐらいのところにあり、山間の緑が豊かな町です。

現在の町の人口は1万4000人ぐらいです。川俣町では川俣教会が唯一のキリスト教会で、今年創立107周年になりました。

3年前の東日本大震災では川俣町は震度6でした。礼拝堂や牧師館、教会墓地、町の公共施設などに大きな被害がでした。

震災の翌日の3月12日から福島第一原子力発電所の1号機の爆発が始まりました。政府は原発から半径20kmに避難を指示しました。川俣教会は原発から45kmぐらいのところにあります。私たちは余震と放射能汚染の不安と恐れの中にいました。13日は聖日で川俣教会の礼拝を守りました。その日の朝から、私の頭の中で「鳥のように山へ逃れよ」詩編11編の御言葉が何度も何度も鳴り響いていました。神は私たちに逃げるようにとおっしゃっていると感じていました。

私たちには二人の息子が与えられ、長男は当時大学3年生で東京に住んでいました。次男は中学2年生でした。14日に次男は川俣中学校に登校しました。幸いにも歩いて5分ぐらいの所に中学校がありました。先生は生徒の安否確認をし、生徒たちは屋内退避と、学校はしばらくの間、休校の指示がありました。川俣中学校に通学したのは、この日が息子にとって最後の日となりました。

14日午前11時、原発の3号機で爆発があり、2号機も夕方から非常に危険な状態になりました。私たちは迷いと葛藤の中にいましたが、子どもの健康を考え、教会役員に避難の件をお話し、15日に川俣町を後にし、私の実家のある山形県米沢市に午後1時30分頃に到着しました。築80年になる牧師館も相づく余震で危険な状態でした。教会員も半数以上の方々が知人宅や親戚宅に避難し、外国人の方は出国しました。後に1週間から2か月ぐらいで川俣町に戻ってこられました。が、現在避難中の方もおられます。



2013年 補修後の川俣教会外観

3月20日は、聖日礼拝の御用のため、主人は川俣町に戻り、避難しないで残っている教会員と共に礼拝を捧げました。

3月15日の午後から16日にかけて、雨や雪と共に大量の放射性物質が福島に降り注いだことが後に分かりました。川俣町と隣接している飯舘村や川俣町の山木屋地区は、のちに計画的避難区域となりました。

次男は、家族で祈り話し合い、転校を決断し米沢市内の中学校に中学3年の1年間を通学した後、山形県立米沢興譲館高校の3年生で大学進学を希望しています。主人は川俣教会の牧師館に住み、伝道、牧会をさせていただき、私は週末に米沢市から川俣教会に通っています。次男が高校を卒業するまで避難生活を続ける予定です。

日本基督教団並びに東北教区のご支援、皆様の尊い献金とお祈りをいただき本当にありがとうございます。川俣教会の牧師館は新築をし、礼拝堂は改修工事、墓地の道路は復旧工事を行うことができました。

除染についてお話しします。除染とは放射能汚染を出来るだけ取り除いていく作業です。震災後まもなく保育園、幼稚園や小学校、中学校、高等学校のグラウンドの土を削ったり、側溝のドロを取り除き、木の枝を払い、校舎の屋根や壁の水洗いをしました。思うように放射線量が下がらずに何度か除染を行い、低い値におさめています。また、町では自治会ごとに住民も協力して、通学路を高圧洗浄機で水洗いし、歩道の草刈りをしました。川俣町の一般住宅の除染が遅れておりますが現在進めているところです。教会や、山の中腹にあります教会墓地はまだ始まっていません。町の除染土を置く仮置場がいっぱいになるので、捨てる場所を探しながら作業をしているからです。事故直後、壁や屋根は水洗いをしていましたが、今は特殊な雑巾で擦り取るようにしています。汚染後数年経ち水では落ちにくくなっている事と、汚れた水を周辺にまき散らしてしまうからです。

震災前、川俣町の人口は1万5000人ぐらいでしたが、現在は1万4000人程になりました。昨年生まれた赤ちゃんは50人でした。現在18歳の次男が生まれた時は150人ぐらいでしたので3分の1になりました。また、20代から40代の女性、すなわち出産、子育て世代の割合が少なくなっています。もともと川俣町は過疎地でしたが、原子力災害それに伴う避難により、過疎化がスピードを増しています。

このような環境の中にありますが、川俣教会では今年のイースターに受洗者と転入会者が与えられ、少しずつ震災前の教会に戻りつつあります。教会の使命は御言葉を宣べ伝え、イエス様の十字架による救いの福音を伝えることにあります。これからも、教会にしか出来ない御言葉による、解決、平安を宣べ伝えていきたいと思います。

最後に、川俣教会に赴任する時与えられた御言葉ですが、この御言葉が今も心に響いています。

「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる。」（使徒行伝18章9～10節口語訳）

これからの川俣町、福島、日本、世界がどの様に導かれていくのかは、全てを創り、支配して下さる神様にお委ねし、私たちは聖霊様のお導きに従って歩んでいきたいと思います。

当時のことを振り返って思うことは、大きな地震があり、余震が絶え間なく続いた中で福島第一原発の爆発がおきました。混乱の中にありましたが、放射能汚染の危険を感じたのならなるべく早く、その場所から避難することが大切だと思います。私の住んでいる所は、避難指示が出なかったですが、原発から45kmという近さ、住居が木造の古い建物であった事を思うと、避難を実行した判断は良かったと思っています。車のガソリンも手に入らない状況でした。幸い自家用車にはガソリンがありました。日頃から災害などの避難の為に、ガソリンはメーターの半分以上にしておく事を心がけています。

放射能汚染に苦しめない世界になっていければと願っています。



川俣町の鳥

うぐいす（未来・希望）

川俣町公式サイトより

崎山比早子氏仙台講演会 実施報告

6月17日（土）、せんだいメディアテークで医学博士である崎山比早子氏講演会「低線量被ばくによる健康被害」を実施しました。180名を収容限界とする会場に、立ち見がびっしり出るほどの方がおいでくださいました。ご来場ありがとうございました。（きらきら発電とあいコープみやぎとの共催）

講演の冒頭、福島県内で流されているという、福島安全宣言CM「心の除染」編をご紹介します。CMによると、『福島でもっとも危険なのは迷信による「心の汚染」です。いま、必要なのは「心の除染」。』という内容です。著名な科学者が籍を置く「放射線の正しい知識を普及する会」によると、福島は安全だとし、放射線による健康被害ありません、と謳っています。さらには、「心の除染」を行うためには放射線に関する「正しい」知識を教育する必要があるとしています。

講演の後半には、原発事故前、「国民が僅かな放射線を恐れて、原子力の需要が進まず、エネルギー問題の観点から日本の前途が危うくなるおそれがある。」として、放射線の危険性を過小評価した認識に立った放射線教育や、電気事業連合会（電事連）などにより、規制当局構成員・放射線専門家への被ばくに関する規制緩和の働きかけが長年にわたり続けられてきたことをご報告されました。

現在、放射線による低線量被ばく影響の考え方について意見が分かれている状況がありますが、「国際的な合意を外れて低線量被ばくのリスクを大きく見做すことは受け入れられない」とし、「福島の復興を阻害する」とした17名もの著名な国内科学者や研究者による意見書が、ある裁判の中で崎山氏に対し送りつけられたことをご紹介します。

ICRPですら、しきい値なし直線（LNT）モデルが採用されていますが、崎山氏は放射線被ばく量がゼロではない限りリスクはゼロではない・1mSvという年間被ばく限度も“安全”基準ではない、ということが国際的に確認されているとし、低線量被ばくによる健康影響が示されているデータも複数ご紹介されました。そして、震災後に行われている福島県「県民健康調査」で甲状腺がん（疑い含む）の子どもたちが191人確認されていることや、自らが代表理事を務める民間基金「3・11甲状腺がん子ども基金」に支援申請された甲状腺がんの子どもたちやご家族が置かれた厳しい状況などをお話しされました。

福島県外の宮城県や周辺県では、放射能に関する公的な健康調査がほぼ行われていませんが、「3・11甲状腺がん子ども基金」によると、福島県外でも東日本の広域にわたり、甲状腺がんの子どもたちが複数確認され、中には重症化した方や、病巣の摘出手術後に再発したケースも報告されています。

チェルノブイリでも当初は認められませんでした。後年、周辺地域における甲状腺がん多発が事故原因であることが世界的に認められるようになりました。「影響ない」と最初から決めつけるのではなく、福島県内で多発している甲状腺がんや珍しい人々が苦しめた現実を直視し、影響があるのかどうか慎重に、長期的に観察（甲状腺モニタリングなど）していくことが、放射能汚染地での営みを続けている人々や未来世代のために必要であり、それが、私たちの責任ではないでしょうか。

崎山氏のご講演を通して、ひとりひとりのいのちが大切にされることとはほど遠く、経済優先や原子力推進のために行われてきたことが、事故後も「放射能安全」キャンペーンという形で繰り返されている状況を知り、学ぶことができました。日本の知的レベルの現状を悲しみ嘆かれた崎山氏に共感すると同時に、今も終束していない原子力災害を忘却せず、これまで、そして今、生起している現実から目を逸らさず、私たち市民や住民自身が主体的に学び、つながり、自信をもってともに歩んでいくことの大切さを強く感じられた素晴らしいご講演でした。

会場いっぱいの参加者とこの時間を共有できました。関係者のご尽力にお礼申し上げます。

講演動画などweb上で公開しています。ぜひご覧下さい。<http://tohoku.uccj.jp/izumi/?p=7969>

文責 いずみ事務局長 服部 賢治

「3・11甲状腺がん子ども基金」への会場カンパ116,937円、ありがとうございました。



立ち見が出るほど
いっぱい！

・大変わかりやすい講義。17名連名の御用学者に怖い思い。

・4年前石巻の講演を聞かせてもらった。娘が甲状腺嚢胞で、心配。

・閾(しきい)値がない、全くその通りだと思う。

・自分の頭の中で整理できた。医療被ばくにも触れてもらい、なるほどと思った。

・放射性廃棄物の混焼やすきこみ・堆肥化も危険と主張してほしかった。

・わかりやすくて良かった。

・専門的部分は理解不能だったが、大筋勉強になった。確信につながった。

・何事も自分で判断することが大切と感じた。

・6年以上経過し、ますます判断(子どもへの対応)が難しくなっている。

・「一人ひとりでは微力でも」に共感。先生から勇気とエネルギーをもらった。

・知らないうちに低線量被ばくで体内が傷つけられていると知った。

・自治体や学校の健診に甲状腺検査が組み込まれるといいなと思います。

・東電の過失責任を問い続けたい。

・教会で被ばく者の声を伝える朗読会を続けている。内部被ばく、勉強になった。

・ICRPの腐敗ぶりに、今更ながら驚いている。

・もっと長い時間の講義にしてもよかった。

・正しい知識に基づき、正しく恐れる。120年先の復興を考えましょう。

・とても良い企画、ありがとうございます。

・今後も仙台で生きていくうえで、真実を知ることの大切さを切に感じます。

参加者のご感想より